

字名からみた綾部城下町の
成立発展と漢部郷^{あやべ}

三 好 博 喜

2021 8月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

字名からみた綾部城下町の あやべ 成立発展と漢部郷

三好博喜

1. はじめに

平成の大合併では多くの市町村が合併し、新たな自治体が生まれた。それに伴い、新たな地名が誕生し、かつ歴史的地名が消滅してしまったところもある。また、圃場整備や区画整理事業、住居表示の導入によって字名は次々と失われ、忘れ去られている。地名の由来にはその場所の特徴や歴史が隠されていることが少なくない。したがって、字名は過去を類推する手掛かりともなりうる。字名は貴重な文化財であり「消滅字名の収集保管が必要である」と唱える研究者も多い。

本稿では京都府北部に所在する綾部城下町が近世初期に形成されて以後、近現代にかけて発展していく街づくりのなかで、移ろう字名の状況を確認しつつ、近世以前の様子を類推してみたい。

2. 前期綾部陣屋

綾部藩は、寛永10年(1633)3月5日、九鬼隆季が丹波国^{いかるが}何鹿郡に8か村、天田郡に19か村、両郡27か村2万石を拝領したことにより成立した。寛永11年11月4日に綾部へ入部している。このとき、何鹿郡の綾部庄下市場に館を構え、藩政を執り行う。これが前期綾部陣屋である。

前期綾部陣屋の様子は、綾部市資料館蔵の『古屋敷之図』に詳しく描かれている(写真1)。絵図は「古御屋舗図 文化十三年六月写」とあるように文化13(1816)年に写された



写真1 古屋敷之図(前期綾部陣屋)

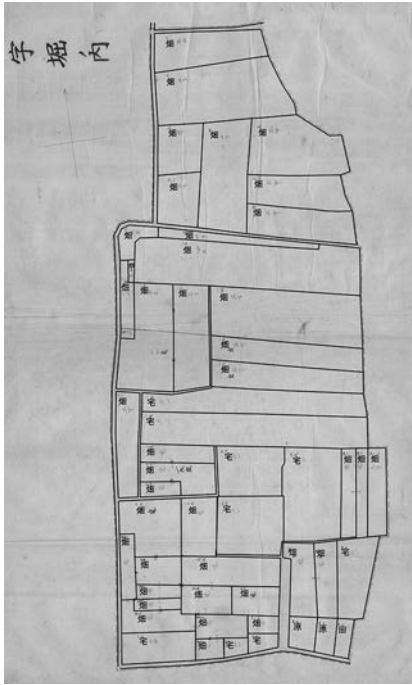


写真2 宇堀内字切図

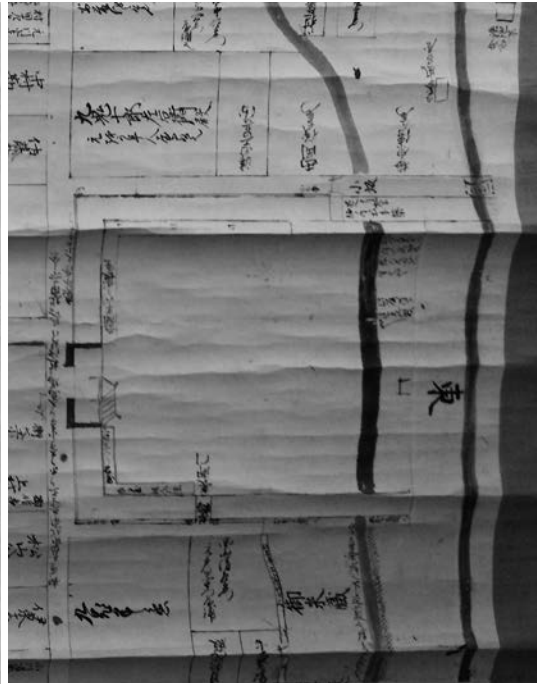


写真3 古屋敷之図(屋敷部分)

絵図である。後期陣屋へ移転後170年近く経った時点の写しであり、原本がどのようなものであったかはわからない。絵図は墨書きされ、青色で水・川筋、黄色で道筋を彩色している。また、薄墨を使って岸(段丘崖)を表現している。屋敷規模は、南北45間・東西50間である。屋敷廻りに武家屋敷を置き、西側に町家を配している。前期綾部陣屋の屋敷地は、現在の京都市立綾部高等学校東分校舎のある綾部市川糸町堀ノ内の位置にあたる^(注1)ことが既に指摘されている。ここでは具体的資料との比較で、このことを確認しておく。

明治44(1911)年5月調製の『何鹿綾部町大字本宮町村字切図』の宇堀ノ内(写真2)と絵図(写真3)では、屋敷西側の道が北西角で鍵の手に折れている他は大きな変化はなく、比較しやすい状態にある。絵図(写真3)では東側を除く屋敷の三方向に堀を設けている。地籍図(写真2)では屋敷地と考えられる北側に細長い地割で示された区画が認められ、道に沿って南へと折れる。西側では表門に相当する部分を挟んで南北方向の区画が認められる。南側では明確に対比できる地割は確認できないが、道が途中までのびてきていることから、この道が屋敷の南側の道の名残りと思われる。宇堀ノ内の東側は、段丘崖で、一段下がって字下溝口、さらに綾部用水を挟んで字南下市場となる。絵図(写真3)でも屋敷の東側に薄墨で岸を表現した部分があり、「此ノウス墨ハ岸之高サ五尺或ハ六七尺有之也」とある。現在由良川沿いに堤防が築かれてはいるが、今でも高等学校東分校敷地の東端には段丘崖

が確認できる。絵図に表現された岸(段丘崖)と綾部用水は、絵図の位置のまま現在も追うことができる。また、城地の南東から北西に流れる水路は田野川から取水した上井溝で、現在も暗渠として機能している。上井溝に沿った一带は帯状の低地で、陣屋・町分と村方を画する堀の役割を果たしていた。^(註2)

これにしたがって武家屋敷の範囲を復元すると、北はJ R舞鶴線付近、南西側はJ R山陰線付近、そして西側は京都府綾部総合庁舎西側の街路で区画される区域となり、町家はその西側にあたる。概ね現在のJ R山陰線とJ R舞鶴線とに囲まれた範囲がこの絵図に示された範囲といえる。

前期綾部陣屋は、絵図に「慶安三年三月廿七日巳之刻出火 下市場之御館并家中侍屋敷不残 町屋数百軒焼失 申之下刻火鎮ル」とあるように、慶安3(1650)年に火災で焼失している。前期綾部陣屋は建設から20年足らずで焼失し、上野台地へと移転することになる。前期綾部陣屋の跡地は、明治44(1911)年の字切図では大部分が畑と表記されており、後期綾部陣屋が成立したのちは耕作地へと転換が図られた。ここに残る字名は北古屋敷・南古屋敷・北下市場・南下市場・天王森・下溝口・上溝口・上番取・下番取・丁畠・堀ノ内である。この絵図の賛には「図ハ當時下市場綾部館「現今古屋敷又ハ焼屋敷トモ云」とあり、北古屋敷・南古屋敷の字名は近世以降に成立した可能性が高い。

3. 後期綾部陣屋

絵図(写真4)^(註3)は、慶安3(1650)年5月3日、九鬼式部少輔(隆季)が屋敷替えの許可を求めするために幕府へ提出したものである。九鬼式部少輔の花押入りであることから幕府に提出した正本であることがわかり、3月27日の火災から30日余りで立案・提出したことになる。図中に添書きがあり、「只今之居屋敷ひきく御座候而 綾部用水出候得バ 侍屋敷江茂水少々徒き申候間 此絵図面之所地形高ク御座候間 屋敷取替仕度奉存候」とあることから、下市場での再建をしなかった理由として、出水による被害を挙げている。

前期綾部陣屋に隣接した由良川は頻繁に氾濫する河川で、由良川中流域では寛永12(1635)年から平成27(2015)年までの380年間に150回を超える洪水に襲われてきた。^(註4)綾部市史の水害史年表によれば、寛永12年8月13日に「大水のため丹波福知山の町皆流れ人多く死す」とある。綾部城下においても被害が生じただろうことは予想される。前期綾部陣屋は寛永11(1634)年に、梅原弾正忠の館を移して城館を築いている。その翌年には早くも水害にあっている可能性が高く、その後も度々被害を蒙っている様子が読み取れる。こうした状況を踏まえ、あるいは屋敷替えのタイミングを早くから探っていたのかもしれない。^(註5)

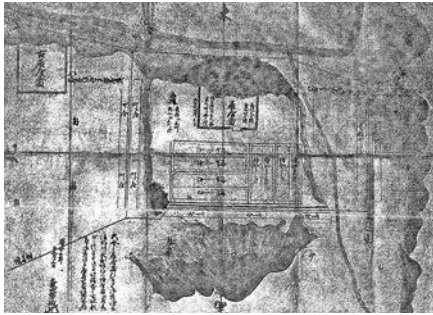


写真4 左：後期綾部陣屋図(慶安3年)

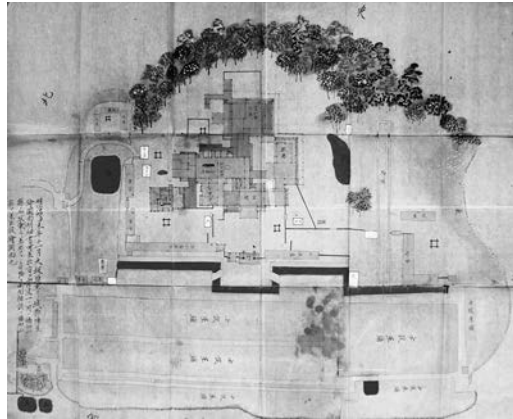


写真5 右：後期綾部陣屋図(明治4年)

後期綾部陣屋を築いた上野台地は、東の本宮山・西の寺山に挟まれ、南北は段丘崖となっており、本宮山の東には由良川が流れる要害ともいえる地である。少なくとも水害からは無縁の地といえる。

絵図には藩邸の規模は南北80間・東西40間と記されている。しかし、九鬼家の記録である『履歴集』によれば屋敷規模は南北70間余・東西43間余である。計画段階と施工段階では、南北が短縮され、東西に拡張されたことになる。後期綾部陣屋が上野に完成するのは慶安4(1651)年であるが、この事由は不明である。

慶安3年の絵図には、町家は北側の段丘崖を降りた地点に東西に表現されている。後の本町に当たる通りと思われるが、すでに町家が形成されていたのか、計画図であるかは判然としない。

綾部市資料館が所蔵する絵図(写真5)は明治4(1871)年に政府に出した彩色絵図である。藩邸部分が強調され、武家屋敷が矮小化されている。これは屋敷の間取りなどを詳細に表す必要があったために採られた手法と思われる。

後期綾部陣屋は移転後から明治時代になって綾部藩庁が廃止されるまで200年以上動くことはなかった。城下町は、大手門に通じる田町、田町から京街道へ続く本町、福知山街道へ続く西町を中核として町屋が形成された(写真6)。町並み

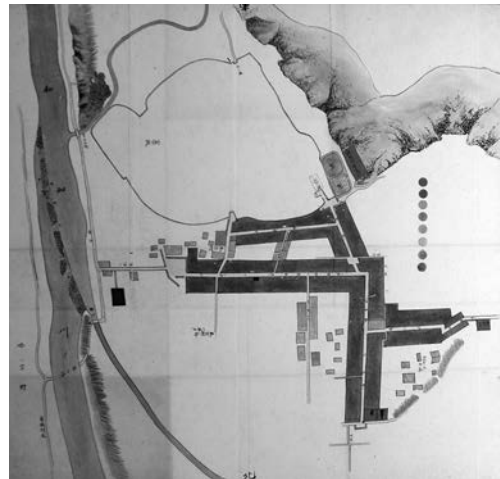


写真6 綾部町屋図(明治時代中期)

は丁字形に連結し、街路は食い違いや鍵の手となっている。町の端には寺社を配置し、土塁を設けるなど、明らかに城下町の様相を呈している。綾部城下町が成立する以前は、農村地帯であり、耕地もしくは原野であったものと思われる。城下町の形成に伴い新たな町屋にふさわしい町名が生まれ、そのために消滅した字名も少なからずあるものと思われる。次に字名の変動をみていく。

4. 蝕まれる字名

綾部市では昭和28(1953)年12月に字区域及び名称を変更したことにより、新町名となり、特に市街地では字名が使われなくなった。

明治15(1882)年製の地籍図(写真7)には現在の綾部市天神町・相生町にあたる箇所に西綾部の字名がある。また、西新町を挟んだ南にも西綾部の字名がみえる。この図からは飛地状に分かれて西綾部があることがわかる。次いで、昭和11(1936)年製の地籍図(第1図)では、南にみえる西綾部の地区は一区画を残して広小路や西新町に組み込まれている。また、西綾部の西隣にある西馬場の字名は、明治15年製地籍図(写真7)では西側の地域と南東にやや離れた飛地としてあることがわかる。この飛地は昭和11(1936)年製の地籍図『土地宝典』(第1図)ではやはり西新町となり、消滅している。したがって、西綾部・西馬場の飛地状態が生まれた要因は西新町の発展にあると考えられる。

西新町の名称は、綾部城下町が形成されて以後使用される町名である。町分の名称には田町・本町・西町・上町・新町・広小路・西新町があり、後期綾部城下町として発展した。西新町は元禄15(1702)年に広小路と西新町に分かれていることから、綾部城下町の発展に伴って発展してきた町分であることがわかる。明治期以降も中心市街地として発展し、再編が図られてきた。市街地の発展は旧来の字名を浸食し、新たな地名へと変えていく。このことから、町屋が形成される以前は、南北にみえる西綾部に挟まれた西新町・広小路一帯も西綾部と呼ばれた区画であったと予想され、西馬場の地名も飛び地状態ではなく、まとまりをもった区画の地名であったと考えられる。

付近の旧綾部町の字名は、複数に分割し方角(東西南北上下)で表される方角地名が複数^(注6)みられる。こうしたことから、西綾部・西馬場に相応する東綾部・東馬場が存在した可能性が考えられる。ただし、西馬場の南には南馬場の字名があるものの、他に余地がないことから東馬場の字名を想定するのは適当ではないと考えられる。「東綾部」は、付近が町屋として整備された西町・本町・田町などの区域に隣接していることから、町分の発展とともに字名が消滅した可能性が考えられる。西綾部の東隣りの区画に字名が存在したとすると、西町に当たる箇所に存在した可能性がある。この推測が正しいとすれば、一定の広

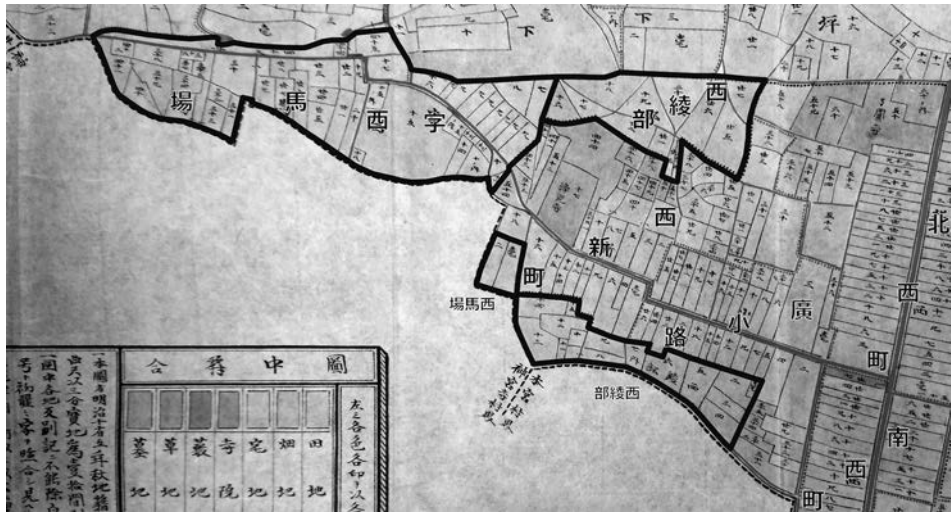


写真7 綾部町地籍図(明治15年)一部加筆



第1図 土地宝典関係部分(昭和11年)合成再トレース

がりをもった区画に対し「綾部」との認識をもっていたことになろう。少なくとも「西綾部」の字名が残ることから、この地が綾部郷の中核をなす地点と考えることができる。

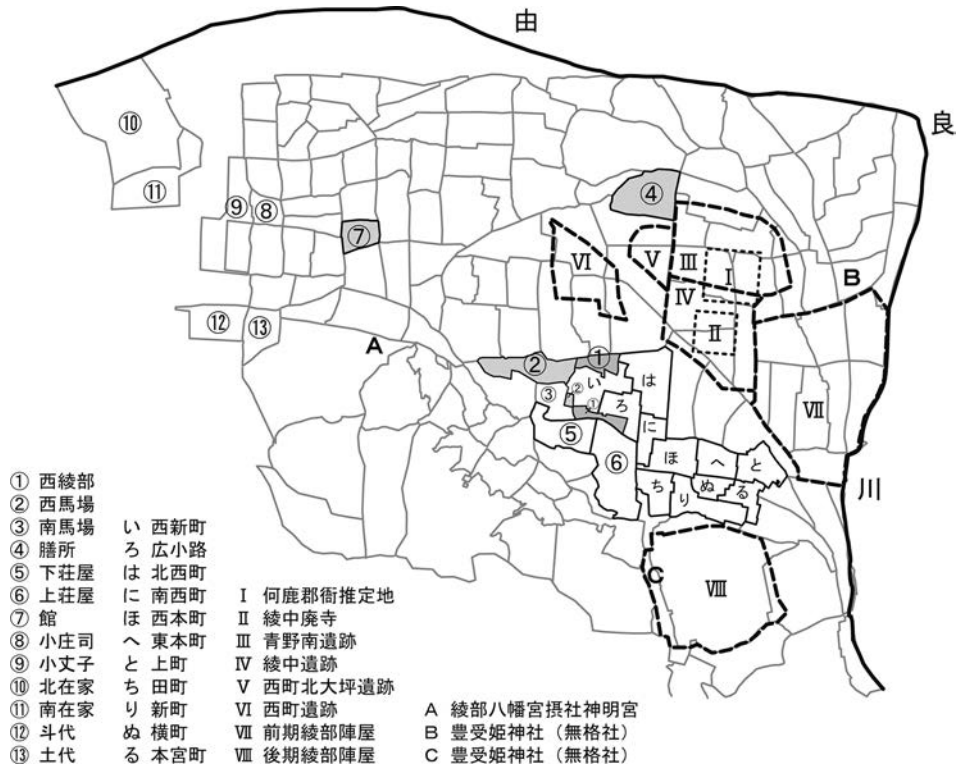
5. 漢部御厨

伊勢神宮の諸国の領地を一覧表にした『神鳳抄』には丹波国漢部御厨の記載があり、上分五石の注記がある。郷名の記載がなく、何鹿郡漢部郷か桑田郡漢部郷かの判断はし難いが、何鹿郡漢部郷とみなされている。古代の何鹿郡漢部郷は近世以降「綾部」へと表記が変わっていく。建久3(1192)年8月の伊勢大神宮神領注文には、神役の勤めを欠いたので御厨の号を廃されてきたと訴えている。建久6年(1195)9月8日の太神宮神主注進状によれば、漢部御厨は仁平(1151ごろ)年中に太神宮に寄進され、元暦元(1184)年に国衛の押妨をとめる宣旨が出され、建久6年にも訴えが出されていることがわかる。漢部御厨については、国衛の妨げによって早い時期に御厨の号は失われたものと推測されている^(注7)。12世紀中ごろに御厨となった漢部郷は、15世紀初頭には上杉氏の所領として出てくる^(注8)。

字西綾部から北へ200mの地点には「膳所^{ぜぜ}」の字名が残る。同じ表記である滋賀県大津市膳所の由来は、大津京が置かれた際に天智天皇の御厨としたことにあるといい、「陪膳の所」から膳所となったとされている。陪膳とは日常の食事ではほぼ天皇に侍するものに限られるが、神供・神饌に対するものもあるとされる。『神鳳抄』は漢部御厨を内宮領としており、当地に膳所の字名が生まれる可能性は高い。当地の膳所の字名も厨に関する地名の可能性が考えられる。付近は何鹿郡衛と推定される地域であり、古代綾中廃寺が建立されている。一定の勢力をもった豪族が荘園として寄進している可能性は高い。

また、字西綾部の南側をみると、隣接した地区に上正屋・下正屋の字名がある。現在は「正屋」と表記されるが、明治17(1884)年製の『丹波国何鹿郡本宮町村全図』では「荘屋」と表記される。「ショウヤ」の音に充てて、漢字表記が変化していることがわかる。「荘屋」が本義であるとすれば、荘園を管理する屋敷を意味する可能性も想起される。

内宮領の御厨には天照大神を祭神とする神明宮が祀られることが多いという。明治16(1883)年の『何鹿郡神社明細帳』によると、旧綾部町内では天照大神を主祭神とする神社は確認できない。摂社の祭神とするのが綾部八幡宮の摂社神明宮だけである。外宮の主祭神である豊受姫命を祭神とする摂社は綾部八幡宮(井倉町)・笠原神社(味方町)・大山祇神社(野田町)、無格社では青野町鶴賀・神宮寺町藤山に豊受姫神社がある。豊受大神は伊勢神宮外宮の主祭神ではあるが、「旦波」の地名起源となった大神であることから祭神とする社が多い可能性が考えられる。天照大神を祭神とする社が少ない点は、早くに御厨の号が失われたことと関連するものと思われる。笠原神社摂社・大山祇神社摂社は、綾部御厨



第2図 明治時代初期字名・神社及び関連遺跡位置図

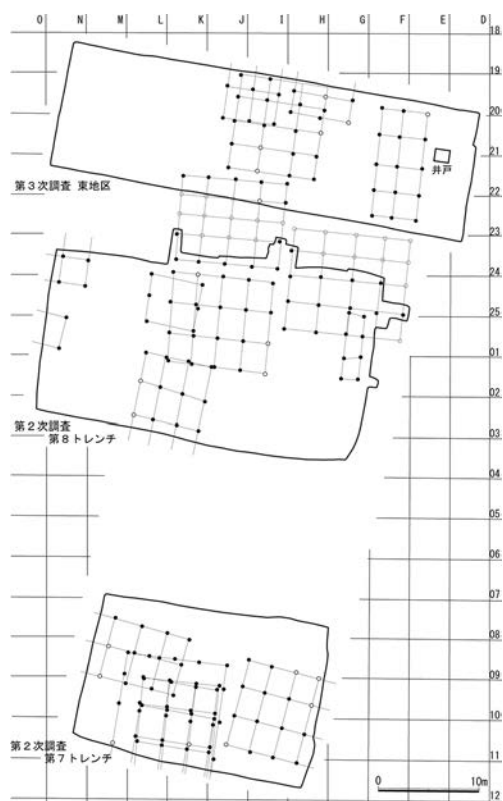
の想定範囲からは逸脱するように思える。綾部八幡宮摂社神明宮・神宮寺町藤山の豊受姫神社・青野町の豊受姫神社の位置関係のみをみるとそれぞれ御厨の西限・南限・東限に位置しているとみることができる。

なお、北西500mには小庄司・小文子・館などの小字が残り、下司の居宅があったと考えられている^(注11)。さらに離れて在家・斗代・土代の字名が残る。いずれも荘園制度に関わる名称と思われる、総合的な視野で調査を進める必要がある。

丹波国桑田郡漢部郷について、その遺称は認められず、比定地もさだまてはいない。漢部御厨が何鹿郡にあった可能性が具体的にみえてきたといえよう。

6. 近隣の発掘調査

漢部郷内に比定される地域での発掘調査は、青野遺跡・青野西遺跡・青野南遺跡・綾中遺跡・西町北大坪遺跡・西町遺跡で行われており、多くの遺構が検出されている。特に西町遺跡^(注12)では中世の掘立柱建物群が集中して検出された。西町遺跡の調査報告書^(注13)では、松尾社家文書にある松尾大神領雀部荘(丹波国天田郡)の訴状の項を引き、地頭の屋敷規模を五



第3図 西町遺跡検出掘立柱建物
(注13文献掲載図に加筆)

間三面と具体的に記している点を重視し^(注14)た。しかし、「五間三面を中世では五間三間の規模をあらわしていると考えられる。」とし、建物構造を誤解して捉えてしまった。

5間3面とは間面記法で表わされる建物規模で、間口5間奥行2間の身舎の3面に庇を付けた建物をいう^(注15)。したがって、発掘調査で検出する柱穴の並びでは、総間口7間総奥行3間を必要とする。調査地外へのびる可能性は残されるものの、この規模に該当する掘立柱建物は認められない。建物規模が雀部荘の地頭の式屋に相当する点や規格性が認められる点をもってこれらの建物群を漢部郷の荘官クラスの屋敷跡と結論づけているが、誤認識に基づいており首肯しがたい。

とはいえ、西町遺跡では掘立柱建物が建て替えを行いながら群を構成し、井戸

を設けている。また、東側の青野南遺跡SK8203にみられるように、長さ2.0m・幅0.9mの掘方に白磁碗1・土師皿4・鉄刀1を副葬した墓壇がある。同規模の土壇は複数存在し、中世段階の墓域となっていた可能性が高い。西町遺跡と西町北大坪遺跡の間には旧河道状の低地があることが発掘調査の結果、判明している^(注17)。この旧河道は、前期綾部陣屋の項で紹介した上井溝に沿った帯状の低地に連なり、由良川へと続く。この旧河道を運河として利用していたと仮定すれば、西町遺跡は荘園内の物資の集積地として機能していたことも想定される。こうした点から中世段階には、西町遺跡に成熟した集落が存在した可能性は極めて高い。その性格を荘官クラスとするかは、さらなる検討を要する。

7. おわりに

綾部城下町の発展に伴い、消滅または蝕まれた字名についてみてきた。こうした字名がいつ発生したかや由来がどこにあるのかは予測の域をでない。その土地の性格については、これまでの発掘調査の成果などとも対照させながら、検討を深めていく必要がある。

本稿を著わすにあたり、綾部市資料館の皆さまには、資料の閲覧・利用にあたり多くの御配慮をいただいた。記して感謝申しあげます。

(みよし・ひろき = 当調査研究センター副主査)

- 注1 綾部市史編さん員会1976『綾部市史』 p.299
- 注2 平凡社1981『京都府の地名』日本歴史地名体系26
- 注3 『忠敬堂古地図目録』第25号(昭和61年新春号)、目録に掲載された資料であり原資料の所在はわからない。
- 注4 小滝篤夫2018「由良川中流部の水害史と地形・地質環境から考える防災・減災」『京都歴史災害研究』第19号 立命館大学歴史都市防災研究所
- 注5 綾部市史編さん員会1976『綾部市史』上巻 p.521
- 注6 (東西)馬場下、(上下)藤山、(南北)大坪、(東西)石ヶ坪、(南北上)大橋、東鵜ノ目・鵜ノ目、(上下)磊、(東西)中居、(上下)入ヶ口、(南北)青野、(東・西)吉美前、(上下)深ヶ、(南北)大町、(上下)ノ切、(東西北)三十代、(上下)恵福田、(上下)有行、(東西)四ツ辻、(上下)番取、(上下)溝口、(南北)下市場、(南北)古屋敷、(上下)正屋、(上下)池内
- 注7 『京都府の地名』日本歴史地名体系26 平凡社 1981 p.330
- 注8 注7に同じ
- 注9 綾部市史編さん員会1976『綾部市史』上巻 p.155
- 注10 律令期より前の丹波・丹後・但馬を含む「丹波国造」の領域を特に区別して使うことがある。
- 注11 綾部市史編さん員会1976『綾部市史』上巻 p.145
- 注12 中村孝行1989「西町遺跡第3次発掘調査概報」『綾部市文化財調査報告』第16集 綾部市教育委員会
- 注13 伊野近富・西岸秀文1987「西町遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第22冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注14 報告では10項目に及ぶ訴状の第3項を引用している(『鎌倉遺文』5315六波羅下知状)。
一 充造地頭庄屋於百姓事
右、如覚秀申者、先例僅造草屋之處、於本宅者為薪、可新造五間三面式屋之由、令譴責之間、百姓等失為方、可逃脫之由、依令申、社家言上事由之日、就被下問狀御教書、雖止式屋微下、
- 注15 足立 康1933「中古に於ける建築平面の記法」『考古学雑誌』23巻8号 日本考古学会
- 注16 中村孝行1983「青野南遺跡第3次・第4次発掘調査概報」『綾部市文化財調査報告』第10集 綾部市教育委員会
- 注17 中村孝行1986「西町北大坪遺跡発掘調査概報」『綾部市文化財調査報告』第13集 綾部市教育委員会